
Cliff of St. Galdobelc

塩結G音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cliff of St. Galobelc

【Zコード】

N1069P

【作者名】

塩結G音

【あらすじ】

四人の英雄の物語。

今回はダイダイ・ソリダスター。

ここは冒険者の宿　”黄金の長靴”　屋。
もうすでに日は沈み、晚餐の時間である。

そこに身体の大きな半裸の男と青い僧衣に身を包んだ男が　一つ
のテーブルを囲っている。

半裸の男は銀髪をオールバックにし、背に巨大な剣を背負う、バ
ーバリアンのダイダイ。

胸に『海王教』のシンボルを下げる、僧侶・ソリダスター。
ダイダイはエールを水のように飲み進め、ソリダスターは赤ワイ
ンを頼んだものの手を付けず、手に持つ本にのめりこんでいる。
と、そこへ一人連れの人間の旅人が姿を現した。

片方は丈夫なスース・アーマーに身を固めた戦士風の男、もう一
人はリュートを手にした吟遊詩人の女だ。

二人はそのままカウンターまで進み、男が店主に声をかける。
「すまないが、伝説の土地・聖ガルドベルクの崖を知らないか?」
「あん?」

ダイダイへの新たなエールを注いでいた店主はそちらを向く。
「聖ガルドベルク?」

「古代太陽教の高司祭の名前ですね」

店主ではなく、ソリダスターが本から顔を上げて答える。
戦士は顔をこちらに向けた。

「知っているのか?」

「この地方の伝承としては、有名ですからね。」

確かに、ラスマーンと言う村の近くだったと記憶しています

「ラスマーン。そうか、その村にあるのだな。
助かつた、ありがとう。」

酒代にでもしてくれ

戦士はソリダスターのテーブルに金貨3枚を置くと店を出て行つ

た。

吟遊詩人の女はためらいがちにソリダスターを見ていたが、戦士が出て行くと慌てて後を追つていった。

「なんてい、古代太陽教つて」

話が分からなかつたダイダイがソリダスターに尋ねる。

「昔に滅びた、今とは少し違う信仰ですね」

「それで、聖ガルドベルクの崖ってなんかあんのかい？」

店主もエールを運びながらソリダスターに尋ねた。

「細々と伝えられている伝承ですよ。」

『古代王国時代の大魔術師にして、太陽神の高司祭である聖ガルドベルクは、あまたの罪人に光の法を教え、新しき道を歩むことを進めた。』

その新しき道とは、死への道である。

死への道にはふたつあり。

ひとつは、無へと帰する暗黒の道。

もうひとつは、再生へとつながる光の道である。』

「太陽神の法によれば、罪人は暗黒の道を通り無に帰り、正しき太陽神の使徒は、光の道を歩んでふたたびこの世に生を受けるとされている」

ソリダスターの言葉を続けたのはつい先ほど出て行つた女吟遊詩人である。

彼女はこちらを向く三人に会釈をし、さらに続ける。

「しかし、罪人にも唯一、光の道へと歩む方法が残されている。』

それが後に聖ガルドベルクの崖と呼ばれたヤスガルン山脈に存在する太陽神の聖地である。

この崖から身を投げたものは、たとえ罪人であれその罪を償われ、光の道を歩む事ができる。』

吟遊詩人は言葉を切つた。伝承が終わつたのだろう。

「さすが吟遊詩人さん」

ソリダスターは軽く拍手をした。

「……つまり、どういう意味だ？」

内容が理解できなかつたダイダイは周りに尋ねる。

「つまり、自殺の勧めだろ？ いやだね、そんなの」

店主は金にならないと、自分の仕事へと戻つていつた。吟遊詩人は、残る二人のテーブルの側に立つたままだ。

「えーと、座るかい？」

ダイダイが席を勧めると女吟遊詩人は礼を言つて席に着いた。

「でもよ、なんで太陽神はそんなことを推めるんだ？」

「太陽神の方針は『闇強ければ陽、さらに強く』。

どのような悪事もそれに勝る善行を行えば救うと諭す宗教ですか

ら。

いかなる罪も死よりは軽いということです」

ダイダイの質問にソリダスターが答える。

「博識、なんですね」

吟遊詩人は笑顔を向けた。

「だろ？ こいつ、海王教の司祭のクセに、こんな事まで詳しいなんてよ」

ダイダイはソリダスターのシンボルを吟遊詩人に見せるために、引っ張つた。

首にかけてある鎖がソリダスターを前に引っ張つた。

「うえ。ダイダイ、私は司教です。

ところで、何の御用ですか？」

「あつ」

ソリダスターに言われて戻ってきた理由を思い出した。

「ニーロットを、彼を助けてあげてください」

「私はイーファンといいます。見てのとおりの、吟遊詩人です」

「俺はダイダイ。戦士だ」

ソリダスターは何も答えない。

「彼、ニーロットは東方地方のある王国に仕える騎士でした。」

真面目に騎士を行つていった彼でしたが、ある日一人の商人を国王を狙つた暗殺者と誤認し、切り殺してしまいました。

その商人は勘違いされても仕方がない落ち度があつたため、国王は彼に軽い罰しか与えませんでした。

しかし、二ーロット自身が自らの罪を許せず、それを償つためには自決しかないと思い込んでしまったのです。

でも、単なる自殺なら太陽神は認めません。

そんなときに二ーロットは詩人の間で伝わっていた先の伝承を聞いたのです。

それこそ自分が救われる唯一の手段と考えた彼は、死に場所を求めて、ここまで来てしまったのです

「それで、自殺を力づくで止めればいいのか？」

ダイダイは大きな一の腕でコブを作つて見せた。細い女性の腰ほどはある。

イーファンは首を横に振つた。

「あの人は真面目で、一度決めたらそう動きません。
力づくなんて無理です。

でも、あの人は悪い心はありません！！ 優しくて、ただ不器用な人なんです！！

どうか、あの人生き残れる手段を見つけてくれませんか？！！
「あなたは、何でそこまであの騎士に頼るんだ？」

ダイダイが尋ねる。

「彼とは、幼馴染みで、」

「愛して、らつしゃいますね？」

今度はソリダスターが尋ねる。

「おいおい

ダイダイがソリダスターを睨む。

「……はい」

小さく答えたイーファンは赤くなり、目線を泳がす。

「なぜあなたまで赤くなってるのですか？」

ソリダスターはつられて赤くなつたダイダイに尋ねた。

「う、うるせい」

「しかし、困りましたね」

ソリダスターはテーブルの上に手を組んだ。

「この伝承、実は単なる夢物語じやないんですね」

「え、そなんですかっ！」

イーファンが慌ててそちらを見る。

「まあ、正確なことは語り部が確かラスマーンにもいたはずですが
で、彼に尋ねればいいことですが」

ソリダスターは今度は次の注文を運ぶ店主に声をかけた。

「店主、確かラスマーンから今、山賊の退治の依頼が来てたとか」

「あん？　ああ、そうだそうだ」

他の人への品をダイダイたちのテーブルに置き、胸から小さな紙を取り出した。

「えつと、『山賊ガ現レタ。至急冒険者雇イタシ。ラスマーン村』
よく知つてたな」

「お店に入ったとき、見えたものですから」

冒険者は宿屋・酒場で仕事を捜す。表に依頼の紙が張り出される
のだ（大っぴらにできる仕事は）。

しかしここを始め、大きな酒場ほど、持ち込まれる依頼の数は多く、張り出しの数が増える。

その中から、一介の村の依頼を覚えているなどあまりないことだ。

「小さな村だからな、報酬はそこまで期待できないが。
どうだい、やるのか？」

「どう、ぜん」

答えたのはダイダイであつた。

英雄的行動が大好きな男である。

「すいませんが、イーファンさん。

この仕事、ニーロットさんと一緒に引き受けてもうえませんか？」

「え、ええ。構いません。

彼もこんな依頼は見過ごせない人ですから

「当たり前ですが、あなたの依頼もお引き受けいたします。
申し送れました、わたくし、海王教司教のソリダスターです」

手を胸に当て、ソリダスターは軽く会釈した。

「？ なんかあつたか？」

ダイダイは不思議そうな顔をした。ニーロットの話をすでに忘れている。

「イーファン、いい人たちに会えたな」

ダイダイが運転する馬車の荷台、ニーロットにイーファン、ソリダスターが乗る。

彼に声をかけられ、ニーロットは笑顔でうなずく。

「私最後の仕事、見事果たしてみせよう」

剣を掲げて語るそれを聞いて彼女の顔が軽く沈んだ。

ソリダスターはいつもの通りに揺れる馬車の中で本を読みふけていた。

馬車は無事、一日の日程でラスマーンの村に着いた。

なんと、ちょうどそのタイミングで村は山賊に襲われていた。

数人の山賊が人々を追いかけまわし、火を家々に放っているのだ。

ダイダイとニーロットが馬車から飛び降り、すぐさま迎撃体制につく。

すると山賊たちは、ニーロットを指差した。

「何だお前らは。さては国の派遣兵だな！！」

どうやら彼の服装が勘違いを招いたようだ。ちなみに半裸のダイダイは下男とでも見られたのだろうか。

7人の山賊全てがこちらへ挑んでくる。

それらは一様にショート・ソード、ソフトレザーアマーを装備している。

「やれやれ」

ソリダスターも荷台から降りる。

吟遊詩人のイーファンは戦闘はできない。荷台から降りない。彼は胸のシンボルを振り、その下から指輪をつまみあげた。

「ウンディーネ、消火の方を頼む」

言うと指輪から20cm程度の水で構成された女性が飛び出し、ソリダスターを一回りすると燃える家に向かって飛んでいった。

敵は目の前の山賊だけではないのだ。

被害は最小限に抑えるべき。そう思いながら視線を山賊と争う二人に戻すとこちらは優勢。

「一ロットは器用にブロード・ソードで一人の攻撃をいなし、切り付けていく。手首の頸動脈を切つた。

ダイダイは一斉に振りかぶった5人の一撃を背負っていた大剣（布で隠れたそれは単なる鉄板に見える）で受け、押し返す。

五人はしりもちをつけ、ダイダイを見上げる。

その視線が気持ちいいのか、ダイダイは追撃をしない。

「くそっ」

残った一人が人質とばかりに荷台へ、飛び込もうとするがその前にはソリダスター。

今度はシンボルを持ち上げ、衝撃の呪文をそいつにぶつける。一撃で山賊は動かなくなつた。

「覚えてやがれ！！」

ダイダイに倒されただけの山賊たちは捨て台詞を吐いて逃げ出した。

「なに、やつてるんですかね？」

「え？」

5人もの山賊を逃がしたダイダイはソリダスターに冷やかな目で見られた。

「一ロットも荷台に寄り、中のイーファンに説明していた。

山賊、捕獲2人、逃亡5人。

火災はウンディーネによつてボヤですんだ。

彼女は自信たっぷりにソリダスターの前で舞つて見せると指輪へ戻つていった。

「精靈使いなのですか？」

荷台から降りたイーファンはソリダスターに尋ねた。

「まさか。私は単なる僧侶です」

『海王教』のシンボルを持ち上げる。

「ただ、ありがたい事に水の精のご加護を受けています」

僧侶は笑んだ。

山賊の襲撃を少なく防いだ4人を村は歓迎してくれた。
さらに宿屋の裏書を見せると質素ながらも宴をもよおしてくれた。
罰として今日は飲まない、と誓つたダイダイは大人しいものだった。

その席で正式にラスマーンの村長は山賊退治を依頼した。
これこそ太陽神、最後の試練とニーロットが引き受けた。
すでに日も暮れているため、出発は明日となり、宿所は村が用意してくれた。

ただ部屋に入る直前、ソリダスターは声を掛けた。

「すみませんね、このよつな時間にお迎えするなんて」

「いえ、かまいません」

「では、参りましょうか」

深夜、ソリダスターはイーファンを導いた。

行き先は村はずれにある語り部、クラムラーの庵。夜中でありながら、彼は快く一人を迎えてくれた。

「おう、久しぶりだな」

「お久しぶりです、クラムラーさん」

老ドワーフのクラムラーはソリダスターをハグした。

「お知り合い、ですか？」

イーファンの質問にクラムラーは鬚を撫でながら答える。

「ああ、こいつとは1週間、寝ずに語つたものぞ」

「い、一週間」

「ところで、アンタは？」

「申し遅れました、イーファンと申します。吟遊詩人をしております」

「ほお、吟遊詩人か」

クラムラーは少し笑み、ソリダスターも笑顔になった。
「イーファンさん。こちらはね、この国の詩歌の『語り部』なんだよ」

「元は同じ、吟遊詩人さ」

「あ、そうなんですか！」

語り部とは魔術ギルドが認定した賢者のことである。
その知識量をギルドが認めた、ということだ。

確かにこの庵に所狭しと本が置かれている。

「それで、いまさら何の用だい？」

二人に席を勧め、さらにワインをそれぞれに注いでクラムラーは尋ねた。

「”聖ガルドベルクの崖”の伝説について」

ソリダスターの言葉にクラムラーは少し眉をゆがめた。

「それなら、お前さんは知ってるだろ？」

「こちらの方はご存知じやありませんから。

正確なお話を、聞かせてあげたくなりまして」

イーファンを示し、ソリダスターはワインを口に含んだ。

「……まあ、いいさ。

それで、お嬢さんは、吟遊詩人なら、知つてはいるんだな？」

イーファンがうなずく。

「語つてみて、くれんかね」

イーファンは酒場で詠つたのを繰り返した。

「……なるほどね」

聞き終わるとクラムラーは椅子の背もたれに寄りかかった。

いつの間にかソリダスターは本を読み始めていた。

「伝説はそのままさ。

だが、少々現実は違う」

クラムラーは語られない、詩にならない部分を語り始めた。

「ありがとうございました！」

庵を出るとき、イーファンは深々と御辞儀した。

「なに、わしら『語り部』つてのは知識を自慢したいだけさ。何か知りたい詩歌があれば、また尋ねておいで」

扉に寄りかかるクラムラーの奥でソリダスターはまだ本を読んでいた。

「あの、いいんですか？」

「ああ、構いやしないさ。昔からそうさ。

あいつは本の虫だ。俺が隠してた珍しい本をもう、見つけやがった。

夜が明けて、まだこいつに用があるのなら、迎えに来てやつてくれるかね

「はい。また、うかがいます」

イーファンは自分の寝所へと駆けていった。

翌朝、イーファンがクラムラーに会いに行くべど、ダイダイも迎えに来ていた。

本は読み終えたらしく、彼はクラムラーと賭チエスをしてくる。聖ガルドベルクの崖は山賊の砦の向こうに立つてあるらしく、これぞ神のお導きとさらに一一口ロットは決意を新たにした。

4人は朝のうちに山賊の砦へと出発した。

ダイダイの装備、大きなナタ、革のパンツ。ソリダスターの装備、僧衣、シンボル、ウンディーネの指輪。ニーロットの装備、プレートアーマー、ラージ・シールド（背負

つている)、ブロード・ソード。

イーファンの装備、ダガー、ソフトレザーアマー、リュート。

途中何事もなく、山を登ると毎過ぎには人工の建物についた。高さ5mの木造監視やぐらが始めに見えた。男が一人ほど見える。先に気が付いたのはこちらだが、監視やぐらまではまだまだある。やぐらと少しの情報を昨晩の捕虜から得ていたのだ。ここから先は視界をふさぐものはない。少しでも寄ればバレてしまう。

相談の結果、ニーロットの飛び道具ナイフとソリダスターのウンディーネで黙らせる事にした。

まず、ウンディーネが監視やぐらより高い位置から近づき、待機。それからニーロットがナイフで一人を狙う。成功、見事にナイフは一人の喉元に刺さった。

すぐさま残り一人をウンディーネが倒す。悲鳴をあげるヒマも与えない。

それから4人は慎重に山賊の砦に近づいた。

砦は山道をふさぐように急斜面にそつて作られていた。進行方向右手は上への崖、左手は下への崖となり、迂回路はない。監視やぐらを通り越し、5mほどで砦の入り口に着いた。石造りの建物で、正面に入り口が見える。

ニーロットが押すと頑丈な木製扉はゆっくりと開く。彼が振り返ると3人はそれぞれにうなずいた。

入るとまず、たくさん扉が見えた。左は3つ、右には一つ、そして奥に一つ。右は別の通路もつながっている。

ニーロットがブロード・ソードを構えて、右手の扉を開けた。しかしそこにはボウやクロスボウ、ショートソードが転がるだけだった。

椅子が多めに置いてあるのはなにか集まる部屋なのであらう。

続いて左手一番手前の扉を開けた。

慎重に開けたにも関わらず、嫌な軋み音が立つた。

そこは山賊の寝室のようで、4人の山賊が寝ていた。

彼らは扉の開いた音で飛び起きた、が武器も防具も持っていない。すぐさま一一口ツトが切りかかる！ソリダスターは呪文の詠唱。

その後に続いたイーファンは一步下がる。彼女は戦闘を行えないが、最後尾にいたダイダイの足を踏む。

「おわっ」「ごめんなさい」

戦闘になつてそれに飛び込もうとしたダイダイを押し留めたのだ。一一口ツトの剣が一人を切り、ソリダスターの呪文が残りを倒す。山賊たちは武具を手に取る暇もなかつた。

と、複数の足音が響いた。

「なんだ、なんだ、「敵襲か！！」

他の部屋で寝ていたであろう、山賊たちもこの部屋へと集まり始めた。

しかし寝起きの彼らは武器を取るのが精いっぱいで、鎧もきていない。

そして部屋に入れなかつたダイダイがそれを迎え撃つ。

敵の数、6人。

「おつづら～～～！」

ダイダイは背負つっていた大剣を大きく横に振るつた。

一撃で3人の剣、胴体、壁をなぎ払つ。正確には壁に刺さつた。

それは彼の身長と同じ長さな鉄板にも見える、片刃のナタである。驚いて動きが止まる山賊。

その顔にダイダイの右足がめり込む。ボロサンダルだ。

そのまま足を振り下ろし、大剣を持つ左手に筋が立ち、左手一本で剣をもう一回転！

一一口ツトとソリダスターが部屋から出るまでに5体の断殺と一人の頭蓋骨陥没。

壁2箇所に大きくえぐれた跡を残す。

「強いのだな」

二ーロットは剣をおさめ、改めて二人の顔を見る。
彼には持ち上げれそうもない大剣を自在に操る戦士と、彼の今迄
知つている誰よりも前線で的確に唱える僧侶。

半裸でライオンのような銀髪を持つダイダイ、黒い長髪を触角の
よう前に前髪を立ててるソリダスター。

異様な装束で目立つ存在ではあるが実力の表れなのだと納得して
しまう。

「いやー、そうかい？」

「いえいえ、あなたの剣技もなかなかですよ」
照れるダイダイと謙遜するソリダスター。

左手は3つとも寝室だつたらしく、大きく開け放たれ、中は空。
奥の部屋は荒れた食堂で、さらに奥に扉が見える。
それを開ける。今度は自分が真っ先に戦いたいとダイダイが扉を開ける事に。

最後尾は二ーロット。

「それじゃあ、行くぜい！」

ダイダイは鍵、罠の確認もせずに両開きの扉を力いっぱい開く。
と奥、部屋の向こう側の扉も開いた！ピンッ！

「ぐおつ！」

その扉から矢が一本、ダイダイの左肩を刺さった。
裸の肩に刺さった矢は結構太い。

「大丈夫か！」

二ーロットとイーファンが慌てて近づくがソリダスターは辺りの
様子をうかがうだけ。

「ちくしょう、矢なんか撃つてきやがって！」

ダイダイは右手で矢を荒々しく抜くと地面に叩きつけた。
ソリダスターはその矢を拾い上げる。

「毒は、ないようですね」

鋭く尖った、血のついた穂先を確認すると再び捨てた。

「毒つて、それよりも、ダイダイさんの治療を、」

イーファンがソリダスターを見、ダイダイを指差す。

「ああ、大丈夫大丈夫。こんな傷なんて大したことないって」

ダイダイが手を振る。

「しかし、たかがと舐めておくと、」

「俺は死なないよ、こんなちんけな罠では。なぜなら、」

ダイダイは力瘤を作つて見せた。

「英雄の死は立往生か老衰と決まつていいからだ」

自信満々に鼻息一つ。

言葉を失うニーロットとイーファン。クスリと笑つたのはソリダスター。

ニーロットの意見を聞いてもダイダイが先頭のまま。

その部屋は右と奥に扉が見える。

奥の扉はすでに開いており、ボウガンが仕掛けられているだけの小部屋で他に扉がない。

右の扉を確認する。向こうに音はしない。

盗賊業をできる者がいないため、やはりダイダイが普通にあける事になった。

その部屋には木でできた4体の等身大の人形が台座に並ぶ。それは豚のような顔をして、手足も奇妙に歪んでいる。

ゴブリンにも似てはいるが、違うもの。それぞれ槍を手に持つ。と、その4体が乾いた音を立てながら、台座から降り、槍を構えてこちらへと向かつてくる！

ニーロットは後方を確認した後、一人を避けて前線へと回る。

イーファンが後ろに下がり、ソリダスターは詠唱の準備。

ダイダイが剣を斜めに振り上げて（真直ぐ振り上げたら天井に当る）、袈裟切りでまず一体。

「一ロットは槍をかわし、ショルダータックルで身体を敵に預ける。

そして引いていたソードを胴体に差込み、斜めに切り上げる。一
体目。

三体目が突いてきた槍をダイダイが左手で掴み、引っ張ると同時に顔面が砕けるほどの右拳。

叩くために槍を振り上げた四体目は、そのままソリダスターの呪文に倒れた。

全ての人形は動かなくなつた。

「なんだ、こいつら?」

ダイダイは剣をおさめながら言つ。

「樺の木、ですね」

ソリダスターは破片を取り上げ確かめる。

「古代呪文に樺の木でウッドゴーレムを作る方法があります。

恐らく、この部屋に入ってきたものを襲うように、いや違いますね」

台座を確認した彼は言い換えた。

「部屋の扉を開けてある間、動くように呪文が組み込まれています。
まあ、でなければ主である山賊すら襲いますからね」

そこに並ぶ古代文字を正確にソリダスターは読み解いたのだ。

「博識、なんですね」

イーファンは改めて言つた。

その部屋の扉は左右に一つずつ。

左の扉は鍵がかかっているため、まずは右の扉を開ける事になつた。

しかし右は小さな部屋で、椅子と机が一組あるが、他には何もない。

改めて左の扉を手にかけるがやはり開かない。

耳を扉につけると、泣き声が聞こえる。

これが村を襲つた山賊から聞いた情報、村人は鍵の部屋に閉じ込めている、だろ？。

しかし、この鍵を技術で開ける者はいない。

「呪文で、どうにかならないか？」

「一ロットはイーファンとソリダスターの顔を見る。

「ごめんなさい。私は呪文が」

「私は神聖呪文ですから」

「ぶつ壊しちまおうぜ」

そうダイダイが宣言すると誰が止めるよりも早く、扉にショルダータックル。

それはまるで闘牛のように力強いものであった。

木でできた扉は衝撃を受け、ゆっくりと向こうに倒れる。

ドガーン！ 大きな音を立てて、倒れた。

「どうだっ」

自信げに振り返るダイダイに三人は呆れ顔。

「あの、ダイダイさん」

代表してソリダスターが声をかける事にした。

「私たちは山賊を倒しにきたんですよね？」

「そうだな」

「そのためには静かにやつた方が効率がいいですよね？」

「そうだな」

「だから、監視やぐらもあんな方法で倒したんですね？」

「そうだな」

「ところが、今、とてつもなく大きな音がしましたね？」

「そうだな」

「今までの努力、無駄になりましたね？」

「そうだ、な？」

ソリダスターは満面の笑顔でダイダイの顔を指差した。

「どうしますかね？」

ダイダイはうなだれた。

「まあ、落ち着きたまえ」

「一ロットが間に立つ。イーファンは中にならわれていた村娘達を解放している。

「隠れて行動していても、いつかはバレるものだ。それが早いか遅いかの違いじゃないか。

それに、村の人たちを解放するまではいけたのだ。人質の心配はなくなつた

「一ロット」

鼻水と涙の顔を、ダイダイは彼に向けた。

すると再びソリダスターはダイダイを指差した。

「でしたら、これからはダイダイさんが前線で戦つてください。一人で。

「一ロットさんは私とイーファンさんの防衛に回つていただけますか？」

それで許しましょう

「し、しかし」

「いいぜっ！」

遠慮する一ロットに、ダイダイは大声を上げた。

「前ぐらい、俺一人で攻撃しきつてみせる。

それが罰だと言つのなら、喜んで受けれるぜ

本当に彼は喜んでいるようだ。

一ロットがソリダスターを見るとなづいていた。

囚われていた村の女は3人。特に怪我もなく無事なようだ。

山賊の情報をほとんど持つておらず、ただ、一ロットたちの応援をしてくれた。

彼女達は自分で村に帰れるというので、そうしてもらつた。

「山賊は二十人、か」

村娘を監視やぐらまで送り、一ロットは呟いた。

「あと、何人だ？」

ダイダイがソリダスターに尋ねる。

「今迄、何人倒しました？」

ダイダイは両手の指を折り曲げ始めた。
しかし数分たつても、答えはでてこない。

「山賊は14人倒しました」

イーファンが答える。

「そうですね。まあ、ウッドゴーレムが含まれるとは思いませんか
ら、あとやはり6人ぐら」ということでしょう」「うう」

再び皆に入り、今度は右の道へと足を向ける。

すぐに左に曲がるようになつており、そこから先は右手に窓がある。

少し進むと前に扉、左に道と分かれている。

近くの窓から外を見ると右前方に建物、左前方は何もない。

ここが二つの建物の接合部分のようだ（村で捕まえた山賊から聞いた）。

別館に移る前に左に曲がる。

すると行き止まりになつており、左手の壁に扉がある。

「なんだ？まだ部屋があるのか？」

ダイダイが無用心に扉に近づく。

「あれ？しかしここは確か、」

ソリダスターが何か言つ前にダイダイの足元に大きな空間が開いた。

落とし穴だ！

「おわっ！！」

落下直前、なんとか左腕をへりに引っ掛ける事ができ、落下は免れたダイダイ。

「だ、大丈夫ですか？」

「引っ張ってくれ」

筋肉の塊りな本人と、背負う大剣で彼を引き上げるのにかなり手間取った。

改めて扉を確認するが鍵がかかっているのか、木の扉はびくともしない。

「ぶち壊すか？」

そうダイダイは確認のために振り返るとソリダスターが扉に触れた。

そして縁を覗き込むように見て回る。扉自体を搖すつてさらに確認した。

「どうした？」

「偽物、ですね」

扉にノックを一つ。それは鈍い音しか返さない。

「偽物？」

「ええ、壁にはめ込まれた扉、偽物ですね」

二ーロットとイーファンも扉を確認するが確かに向こう側が存在しない。

「どうして、分かったんです？」

「この向こう側、行き止まりの食堂なんです」

笑んだソリダスターの頭の中にはすでにこの建物の構造が入っていた。

少し戻つてもう一つの階へと移る。

順列はダイダイ、ソリダスター、イーファン、二ーロット。ダイダイが扉を開ける。

するとその向こうに、6人の人影が見えた。

それ全てがこちらを向いている。ソフトレザー・アマーをちゃんと着込んでいる。

そのうちの4人が片膝をついてボウガンを構えていた。

「撃て！…」

立つて居る男の号令で、矢が放たれた。

「伏せろ！」

イーファンは一一口ロットに押し倒された。

ダイダイは自らの身体を盾に、顔の前で腕をクロスにして防御する。

ソリダスターは横へとかわす。

一本はダイダイの右フトモモ。一本は彼の左二の腕。

他のはそれて後方へと飛んでいく。

「いけ！！」

先の山賊が号令をあげると山賊たちはボウガンを捨て、手にショートソードで接近戦へ走る。

号令をあげた男もシミスターで近づいてくる。

一一口ロットは素早く剣を抜き、前方へ。

だが、途中でソリダスターに肩を捕まれた。

「約束、ですよ？」

「しかし、ダイダイ殿は、」

一番足が速い山賊がダイダイの位置まで来た、そして吹き飛ばされた。

腕をクロスしたまま縮こまっていたダイダイが、大きく腕を広げていた。

「いつてくな、馬鹿!!!!」

ダイダイは右腕一本で大剣を抜き、そのまま一人ほど巻き込んで叩きつける。

「な、」

武器の大きさに呆然とした一人を左腕ラリアット。吹き飛ばす。

その開いた左脇に別の山賊が近づくがそれに向けてダイダイは大剣を蹴飛ばす。

「ぐおっ」

刃が無い先端が腹に当った山賊はくの字に曲がる。その柄をダイダイが握った。

すると大剣は重力にしたがって、落下する。山賊の足の骨が折れるのが響いた。

さらに近づいた別の山賊は頭を片手で掴み、地面へと叩きつけるダイダイ。

とここで彼は背筋を伸ばした。

いつの間にか、後ろに回りこんでいたシミスター山賊が彼の背を縦に切ったのだ。

「痛つてー」

ダイダイは怒りに任して右拳を力いっぱい後ろに振り回した。

裏拳は受けのために立てたシミスターをへし折り、顔面に当たり、吹き飛んだ彼は壁を壊した。

山賊6人は手傷を負つたダイダイによつて殲滅。

ニーロットとイーファンは言葉を失つた。

「お疲れ様」

笑顔でダイダイに近づくソリダスター。

「さすがにきつい、治してくれ」

「はいはい」

何事もなかつたかのように僧侶はシンボルを掲げ、治癒の呪文を唱えた。

なつた。

痛みで氣絶した山賊からダイダイが大剣を取り返すと別館を進む。左手が窓になり、少し進むと右へと曲がっている。

道なりに行くと左手に扉。ここから外へ、奥へと出れるようだ。

そこを通り過ぎ通路に従つて右へと曲がり、先を右へ、もう先を右に進む。途中に脇道や扉はない。

もう一度、右に曲がると窓が無くなり、右手に扉、左への通路となつた。

ダイダイが右手の扉を開けると、そこはちょっと広い部屋になつている。

大きなテーブルと6個のベッドが並ぶ。先ほどの山賊たちの部屋

である「ひ」。

入ってきた扉の脇に扉がある。他にはない。開けると小さな部屋でクローゼットになっている。山賊たちのいろんな衣類が詰め込まれてはいるが、価値ありそうな物はない。

皆がそこを出ようとしながら、イーファンが何かに気がついた。何かは分からぬが奥の壁がおかしいと感じた。それをダイダイたちに語るとソリダスターが率先して奥の壁に立つた。

さらに胸からウンディーネを招き、確かめさせる。そして壁から一歩離れ、親指でその壁を指差した。

「ダイダイ、GO！」

許可をもらつた猛者は鼻息一つ、壁へと体当たり。そしてど派手に石壁を壊すと向こうへと転がっていく。いや、それは石壁ではなく木の扉であった。小さな部屋を隠していた。

そこには山賊たちが集めたであら「ひ」、宝石や貴金属、貨幣があった。

ざつとみて600Gはトらない。

「おおっ」

純粹にキラキラするものに目を奪われるダイダイ。

「どうします？これ」

ソリダスターがニーロットに意見を求める。

「村に、返してあげねばなるまい」

イーファンがこれらを運ぶこととなつた。

通路に戻り、ほんの少し進むと行き止まりで左手に扉。

「ここが最後か」

ニーロットが呟く。

「そう、ですね。構造的には、最後になりますね」

頭の中に書き上げたこの階の地図を思い浮かべてソリダスターは言った。

「すまないが、頼みがある」

「一ーロットが改めて3人の顔を向ける。

「もし、敵が一人の場合、私一人で戦わせてもらえないだろうか」「息を呑むイーファン、笑顔になるソリダスター、

「えへ、なんでだよ。俺も戦いたいぞ」

文句を言うのはダイダイ。

「頼む」

深々と頭を下げた一ーロットにそれ以上言つことはできなかつたが。

扉を開けたのはダイダイ（罠対策）。

中は今までに比べれば小綺麗な部屋。

一人分のえらいさんの部屋とは分かるがその人物が、いない。テーブルなどを確認すると中から宝石箱が。これも回収。

「入つてくる前に、出たのかな？」

部屋を出ようとするとダイダイ。と、ここでもイーファンが何かに気がついた。

奥に見える窓、その下がズレているのだ。

一ーロットに話すと彼がそれを押す。するとちょうど一人分、通れるほどの穴が出来た。

それをかがんで一ーロットが一番に外に出る。

そして辺りを伺うと木陰に一人の影が。

「そこのもの、出て来い！」

一ーロットがブロード・ソードを抜いて指し示す。

すると舌打ちとともに男が一人、出てきた。

それは今までの山賊のようにやわな装備ではなく、チエインメイル、シールド、バスター・ソードと構えている。

どうやら彼がこの山賊の首領のようだ。

それを確認して、一一口は背負っていたラージシールドを左腕に構えた。

「お見事、でした」

ソリダスターは小さく拍手を送る。イーファンは目に涙を浮かべていた。

「やるじゃねえか、お前」

ダイダイは一一口の首に腕をかけた。

戦闘は一進一退が続いたが、最後は盾を捨てた首領の負けであった。

3人は頼まれたとおり、見守るだけにしておいた。

「いや、ここまで無傷でこられたからこそだ。

二人の尽力には、大変感謝する」

一一口は深々と頭を下げた。ダイダイは照れた。

「さて、行きますか」

ソリダスターは笑顔になつていて。

「伝説の、聖ガルドベルクの崖へ」

一一口は静かにうなずいた。イーファンは息を呑む。

「あ？ なんだそれ？」

ダイダイは何のことだか忘れていた。

峠の裏口から30分程度で目的の地に着いた。

山道から、巨大な岩が突き出している。

それを登つていいくと人工的に平らになつた場所。中央に太陽教のシンボルが描かれている。

そのシンボルの下には古代文字が書いてある。

「聖ガルドベルクの名において、ここに新たなる道が開かれる」とを

ソリダスターが読んでみせた。

岩の先から下は、5mほど手前にオーバーハングする、ほぼ垂直

に100mほどの高さだ。

下の地面には、環状列石が、まるで墓標のよう並んでいて、この崖がいかにも特別な目的で使われているかを暗示している。

「お～、たけえ～」

素直に驚いているダイダイ。

身を守る鎧、盾、剣を足元に綺麗に整頓し、ニーロットは3人を見た。

「さて、今迄、ありがとう」

再び礼をするニーロット。

「戦士ダイダイ殿。その怪力、戦闘能力、すばらしいモノがある。これからも人々のために、精進してくれ」

「お、おう」

手を握られたダイダイは、いまだ何のためにここに来たかを思い出せない。

「僧侶ソリダスター殿。その深く広い知識、剣を恐れぬ心、見事なものだ。

「ぜひ、人々へ分け与えてください」

「お褒めいただき、ありがとうございます」

手を握られ、ソリダスターは笑顔で礼を返す。

「イーファン。本当にありがとうございます。

幸せになつてくれ」

「ニーロット、様」

震えるイーファンの頬に彼は唇を当てた。

そして崖へと振り返り、高らかと祈りをあげた。

「これからみもとに参ります。

聖ガルドベルクの名において、我に光の道を歩ませたまえ！胸の前で指を組むと、崖から躍り出た。と、

「ニーロット様！！」

続けてイーファンがそこから飛び降りたのだ。

「なつ……」

ダイダイと落下中の一一口は驚いた。ソリダスターは笑顔のままだ。

しかし、ここでさらに予想外の事が起きた。

一一口が30mほど落下すると、急に落下速度が落ちたのだ。続いたイーファンも同じ位置から速度が落ちる。何が起きたか分からず、呆然とする一一口。この速度では落下しても死にはしない。

一一口に近づこうと空中を泳ぐようなしぐさをするイーファンだが落下速度は変わらない。

「さて、続きますか？」

ソリダスターも僧衣をなびかせ、脚をそろえて崖から飛び降りた。彼も途中から速度が変わり、ゆっくりと落ちる。

するとウンディーネが指輪から現れ、ソリダスターの周りを飛び始めた。

「一緒に飛べて、嬉しいんですか？」
ウンディーネはうなずいてみせた。

「おれも、」
ダイダイは助走をつけ、大の字に飛び降りた。

「聖ガルドベルクの崖、確かにあそこは罪人を生まれ変わらせる場所さ。

だがな、自ら死のうつて奴の罪なんか知れたものさ。
さらにそれが実行できるなんて陽が強いに決まっている。
その時点で罪は償われている。

そんなこと、思いつめた奴に言つても無駄だらうがな。
だから、あそこには秘密がある。

飛び降りても死ねないんだ。下にある環状列石が魔法を放つている。

実行する勇気あるものを生かすための呪文を。

そこからは、一緒にいる者たち次第だ。覚悟を決めた頑固者を言

い解くしかない。

その、ニーロットだつたか？俺のよつに、生きる道を選んで欲しいな

「

ワインを飲みながらクラムラーは語つた。

「なるほど、話には聞いていましたが。

これが古代で使われていた浮遊の呪文群ですか
降りたソリダスターは早速環状列石を手で触り、その文字を読み解く。

「おもしれ～、もう一度やろうかな」

ダイダイは下から岩を見上げて、はしゃいでいた。

ニーロットは落としたまま膝を付き、呆けている。

その肩に手を回してイーファンはワンワン泣いていた。

「どうこうことだ、君たち！！

どうこうことだ！！！」

ニーロットはイーファンがからみついたまま、ソリダスターを睨みつけた。

「どうつて、見てのとおり、光に生まれ変わったんですね？」

ソリダスターは石に寄りかかり、笑顔を浮かべる。

「私は、死んでいないぞ」

「その死へ立ち向かう勇氣こそ、光の道です。

最初に跳んだあなたの罪は、償われているのですよ

「あの伝承では、死の道を示していたはず」

「伝承は伝承ですから」

言葉を失うニーロット、再び顔を上げる。

「君たちは、知っていたのか？」

「私と、イーファンさんは」

イーファンの泣き声がやむ。

ダイダイは辺りの石に登つてみたりする。

「ニーロットさん、本当に邪悪なるモノならこんな感じ、わざわ

ざ死ぬために探したりしませんよ？」

ソリダスターは笑顔のままだ。

「それによ、ニーロット。」

あんた悪を恨んでたみたいだけじ、山賊や悪党はここだけじゃないぜ？

俺らを呼んでる村々はまだまあるはずだ

ダイダイが鼻息一つ。

何の話をしているかは分かつていないが一応、的確な事は言えた。

ニーロットは言葉を失い、地面を見ている。

「それから、一つ。

イーファンさん、あなたはクラムラーさんの話を覚えてましたか？あのタイミングで」

ソリダスターの問いにイーファンは静かに首を横に振った。

「分かりましたか？

確かに私と彼女は伝承を聞きはしましたが、彼女はそれとは別に身体が動いたんです。

もし、これからも死の道を選ぶなら、彼女も追いかけてきますよ。自分の幸せのために」

しばし沈黙が訪れた。

口を開いたのはニーロットであつた。

「イーファン、すまなかつた」

ニーロットは彼女を立ち上がらせ、抱きしめた。再び彼女は泣き始めた。

「死を選ぶのは、やめた。もっともつと、人々を助け、それからだ」

ダイダイは少しもらい涙をし、ソリダスターは小さく拍手を送つた。

「ありがとうございました」

イーファンが深々と頭を下げた。

村に戻った彼らは喜ばれ、手に入れた（取り返した）財宝の半分

を報酬としてもらい、一晩泊まった。

翌朝、二ーロジットは馬を買いに離れている。

「いえいえ、礼には及びません。伝承を実感する事ができたんですねから」

ソリダスターは手を振った。

「これから、どうするんだ？」

ダイダイが尋ねる。

「ダイダイ様が言われましたとおり、この国では多くの救いを求める声があります。

自由騎士となつて大陸中を正義のために巡るそうです」

「……壮大だな」

「そうですね」

ダイダイの感想にイーファンはクスリと笑つた。

「付いて行くんですね？」

ソリダスターに言われ、イーファンは彼を見た。

「はい。これからも、ずっと」

「がんばってください」

「それでは、本当にありがとうございました」

馬に乗る二ーロジット、その後ろに乗るイーファンがもう一度礼を言つた。

「いや、楽しかつたぜ」

ダイダイが笑顔で返す。

「また、いつか会えるといいな。

そのときはまた、一緒に戦つてくれないか？」

二ーロジットの言葉にソリダスターがうなずく。

「それでは、」

「ご武運を」

二ーロジットは馬を走らせた。そして、見えなくなつた。

「あの一人、どうなるんだろうな？」

ダイダイが馬車に乗り込みながらソリダスターに尋ねる。

「さあ、言われたとおりなら、戦いの道へと進むんでしょう。でも、あの性格なら、長生きはできそうもありませんが」「え、俺みたいな性格だろ？」

「……あなたに気品などいろいろ足したらそつでしょうね。しかし、あなたほど頑丈じゃないでしょ？」「それでも、」

彼らが駆けていった方向を見るダイダイ。

「あの一人なら満足できる生き方をするだろうよ。ソリダスターはクスリと笑った。

「確かに。それだけは確実ですね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1069p/>

Cliff of St. Galdobelc

2010年11月23日23時55分発行